

The Old Curiosity Shop の特性

臼 田 昭

The Old Curiosity Shop は、ディケンズの諸作品の中で、もっとも「パストラル」なものだろう。といっても、この「パストラル」とは、「田園牧歌詩」といったジャンルを指し示す言葉ではない。それは単に「浮世ばなれした」というほどの意味の形容詞である。そしてこの作品にこの形容詞を冠するのは、ただネルとその祖父の、イギリスの田園をへめぐる放浪行が、物語の大きな部分を占めているから、というだけでもない。それよりもむしろ、この作品は、近代社会というものとほとんど遊離しているという意味において、牧歌的な名に値すると思うのである。ディケンズのほとんどすべての小説には、金が実体として存在し、その金が法律や金融の仕組みを通じて力を発揮し、人間性を歪曲し、善良な人びとを苦しめるのであるが、この小説に限っては、そのような悪の力の根源としての金は、実体としては存在しない。

たとえば *Nicholas Nickleby* に出てくる醜怪な老人の高利貸グライドは可憐な少女マデライン・ブレイをわがものにしようとするが、それにはグライドがマデラインの父親に貸した金を棒引きにするという交換条件が裏にあった。つまりグライドは金でマデラインの操を買おうとしたのだ。しかし *The Old Curiosity Shop* では、クイルプは一時ネルを自分の妻に、妾にと考えたことがあったとしても、彼はネルの祖父トレント老人に貸した金をテコに、この計画を強引に実行しようとするのではない。クイルプがトレント老人に貸した金には、ダイヤモンド¹⁾や、あるいはまた、あの骨董店の建物とその在庫品一切、などといった抵当があり、これらの抵当の取り立てが終

1) *The Old Curiosity Shop*, The Penguin English Lib. ed. p. 682, Note 3 to Chap. I. 参照。

れば、キルプとトレント老人の間の貸借関係はすべて清算されるのであって、それ以後キルプは金の力でネルとその祖父を支配することはできない。

この作品における悪の根源は何としてもキルプであるけれど、そのキルプは金にはきわめて恬淡である。彼はただネルやキットのように道徳的に正しい人間が憎いだけなのだ。トマス・フッドの言葉によると ‘a sort of human Caliban’²⁾ であるキルプは、ただキットを陥れるという、一文の得にもならないことに、大枚5ポンドを投資するのを惜しまないほど没利害的である。彼の財力の源は、その廃船解体業、いわゆる ship-breaking という商売にあったはずであるが、彼がその仕事にいそむ姿は、あまり作品の中には出てこない。第62章に出てくる、彼が解体した船のものと推定される、提督の船首像など、転売すればおそらくある程度の金になるはずの品物である。それをキルプは、その顔がキットに似ているからというだけで、自分の仕事場にもちこみ、火掻き棒でつつき、丑の刻参りしながら、その鼻の頭に五寸釘を打ちこんで、キットに対する憎しみのストレス解消をはかり、あたら商売物を台無しにしてしまう。そしてキルプがなぜこう商売の利益を無視してまでキットを憎まなければならないのか、われわれにはとんと合点がゆかない。このキルプの性格を理解しようとするならば、彼はおのれの情念の満足のために没利的に行動する芸術家タイプの人間である、とでも考えておくより他に道はないようである。

ディック・スウィヴェラーについて論じるとすれば、彼を *Nicholas Nickleby* 中のレイフ・ニッケルビーに雇われている事務員ニューマン・ノッグズ、*The Great Expectations* で弁護士のジャガーズの書記をつとめるウェミックと比較するのが便利だろう。なぜならこの三人は、いずれもその職務柄、心ならずもこの世の裏の醜悪さを見聞きさせられるからだ。ニューマン・ノッグズは、この職場の悪の汚染に耐えきれず、酒に溺れずにはいられなかった。ウェミックは、シティをはるか遠ざかるロンドン南郊にゴシック風を真似たおもちゃのお城のような家が建て、猫の額ほどの庭で

2) Thomas Hood, *The Works*, vol. VIII. p. 99. London, Ward, Lock, & Co.

キュウリを作って田園生活の真似ごとをし、屋上の旗竿に旗を上げ、夜の9時にきまっておもちゃの大砲をぶっ放すといった、奇矯な生活を送る。彼が自分の家の周囲にめぐらした濠とはね橋は、単に中世回顧趣味ばかりでなく、職場と浮世からの完全な絶縁の中での個人生活の願望を象徴する。これは現代の定期券通勤のサラリーマンたちが築き上げようとしている、いわゆるマイホーム生活の理想を100年ほど先取りしたものといっていよう。そしてウェミックはこのマイホームに花嫁を迎えようとしているが、そのウェミックをディケンズは年のころおよそ50才と想定していた³⁾ということを聞かされると、われわれはウェミックがいかに営々と努力してこのマイホームを築き上げてきたか、どれほど必死に人生の悪に耐えてきたかを考えさせられるのである。ニューマン・ノッグズとウェミックと、この二人は金と法律と、近代社会の組織を支えるこの二つの力によって大きな影響を蒙り、職場ではほんとうの自己を疎外した生活を送らなければならなかった。自分の家を出てロンドンに近づくにつれて口が重くなり、ロンドンから自分の家に向うときにはその逆になるというウェミックの姿は、そのことを如実に物語っている。しかしスウィヴェラーに限っては、そのようなことはない。口を開けば小唄の文句が唇をついて出てくるほど陽気な彼は、こともあろうに、金と権利関係が一切の思考を支配しているはずの弁護士の家で地下室で、孤児のマーショネスを相手に恋のロマンスを展開することもできるのだ。ニューマン・ノッグズとウェミックに比べて、職場の悪に染まず漂うディック・スウィヴェラーの姿は、白鳥さながらに清純である。

しかしスウィヴェラーのこのような牧歌性は、主人のサンプソン・プラスがきわめて牧歌的な弁護士だったからこそ成り立ち得たのかもしれない。なんとなれば、レイフ・ニッケルビーやジャガーズに比べると、プラスは牧歌的と評するより他にいいようのないほど、弁護士としてまことに無能だからである。人を窃盗の罪に陥れるために、その帽子の中へこっそり5ポンド紙幣

3) これはディケンズの創作覚書による。 *The Great Expectations*, The Penguin English Lib. ed. Appendix B. p. 497.

をねじこむ。そんな危っかしい仕事に手を下すような弁護士がはたしてこの世にいるだろうか。だがブラスはキットを陥れよとクिल्プから指令を受けると、疑うところなくこのことをやってのけるのだ。Bleak House の弁護士ヴォールズは、外出するときはいつも黒い手袋をはめ、私宅に帰ると、「まるで自分の手の皮をはぎとるように」それをぬぐ⁴⁾。また The Great Expectations のジャガーズは、依頼人の応接が終ると、かならず石鹸で手を洗う。彼らはこうすることによって、公人と私人の区別をわずかにつけている。それはウェミックが自分の住居と職場の間に距離をおいたのと同じことだ。彼らはこのように、無意識のうちにも自分の職業的人格と私的人格の間のディコトミーに悩んでいるのだけれど、ブラスにはまったくその気配が見られない。彼は依頼人からの指令があれば、唯々諾々と、自分の全人格をかけて、キットを陥れようとするし、逆に自分の身が危いとなると、いち早く依頼人の秘密を裏切ってしまう。ブラスはディック・スウィヴェラーともども天衣無縫であり、まことに牧歌的な弁護士である。

この作品の中でいちばん金に動かされているのは、強いていうならネルの祖父トレント老人であるだろう。愛する孫娘ネルを貴婦人にと、はかない願望をかけ、賭博に熱中する彼は、ある意味では金銭亡者かもしれない。しかし彼を支配しているのは、金の幻影であって、実体としての金ではない。彼は改心以前のスクルージのように、実体としての金を握り、その握った金に動かされる守銭奴ではない。そして賭博によって一攫千金をというのも、人間性の中にひそむ永遠の願望であり、それでもって彼を近代資本主義体制下の金銭亡者とすることはできない。それに「ネルを貴婦人にするために」という彼のいいわけを、そうまともに受け取る必要もなさそうだ。それは病みつきになった自分の悪癖を正当化するための勝手な口実にすぎないのだから。こういう手段と目的の混同の例は、食うことと生きることについてモリエールが示した有名な区別以外にも、飲酒と社交など、われわれの身边には、引挙のいとまもないほど多く存在するし、目的と手段とが手に手をとって目ま

4) “Mr. Vholes...takes off his close black gloves as if he were skinning his hands.” (Chap. 39.)

ぐるしいロンドを踊り出すと、もう凡人として手におえなくなるのは、われわれの日常的経験である。だからトレント老人の眼中にあるのはただ賭けのスリルだけなのだ。それは *Our Mutual Friend* の中のアル中患者ドル氏にとっての酒と同じである。そしてこの二人は、自分の子供にどんな犠牲がかかっているかはおかまいなし、ただただおのれの悪癖にのめりこむ、ディケンズ十八番の無能無責任な父親像の一例にすぎないのだ。

このように考えるとき、トレント老人もキルプ同様、近代金融組織社会の一員だとはいえそうにないようである。彼の賭博の悪癖を最後まで追及し、彼をしてネルが死んだ後まで、あの静かな村の酒場で、ペニー銅貨を争って、しょぼくれた勝負をつづけさせるというのも、一つの結末かと思われるが、それはディケンズ後期の作品にふさわしいもので、*The Old Curiosity Shop* の場合、彼がネルの旅仕度をもって、毎日教会で彼女を待ちもうける姿は、コーデリアの死体を抱くリアにも似たペーススがあって、物語の牧歌性にかなった結末であるというべきだろう。「悪のための悪」の哲学を実践した芸術家キルプが、テムズ河で溺れ死ぬというのは、多少唐突で重罰にすぎるように思えて気の毒ではあるが、キルプは元来悪役なのだから、それも止むを得ないだろう。そして善玉のトレント老人の場合、その賭博の悪癖がいつしか納まったという話も、妥当なところだろう。

ネルが牧歌中の人物であることはいうまでもない。「乞食になりましょう。心配しなくても、貫いは十分あるでしょう、きっとあるはずです。田舎を歩いて旅し、野原の中や木の下で眠りましょう。もう二度とお金のことや、人を悲しい気持ちにさせるようなもののことは考えないで、夜には休み、昼間は太陽と風を顔に受けて、いっしょに神さまに感謝を捧げ⁵⁾ましょう」と、祖父にいい聞かせて、放浪の旅に出てゆくネルは、まさにアシジの聖フランシスコの一の弟子といってもおかしくない。

5) "Let us be beggars... I have no fear but we shall have enough, I am sure we shall. Let us walk through country places, and sleep in field and under trees, and never think of money again, or anything that can make you sad, but rest at nights, and have the sun and wind upon our faces in the day, and thank God together." (Chap. 9.)

そしてその放浪の旅の途中でネルたちが出会う人びとも、また近代産業社会とは縁の薄い旅芸人の連中ばかりである。コドリンとショート・トロッターの操り人形、竹馬のような高下駄をはいた子供二人に軽業をさせて回るグラインダー一座、ジェリーの犬芝居、大男とか手足のない女など、身体の変形型を売り物にする見世物、トランプ手品師、そして最後にジャーリー夫人の蠟人形など、すべては、大袈裟に言って、中世に存在していてもおかしくないものばかりである。そしてネルの行きつく先は、イングランドの西のはて、はるかウェールズの山を望むシュロップシャの村である。そこには中世の僧院が今もかなりに原形を止どめて残っている。これらのことは、ネルの放浪の牧歌性をいやが上にも強調するものである。

だがその途中、ネルとその祖父が通過する工業地帯の描写は、物語全体の牧歌性に対し多少の不協和音をかもし出しているように見える。これはトレント老人がジャーリー夫人の金を盗もうとしていることをネルが知った直後のことであり、それはネルの受けた心理的ショックの表現なのかもしれない。たしかにロンドンを出て西北へ、シュロップシャに至るというのが、ネルの旅の道筋だったとすれば、バーミンガム周辺の鉄工業地域は、どうしても通らなければならないところだろう。しかしディケンズの最初の意図は、ネルの旅の道筋を終始曖昧なままに止どめ、あてどもない放浪の雰囲気を出すことだったようである。たとえばコドリンとショートの操り人形芝居に同行したネルたちが、第17章でグラインダーの一座に出会ったときの挿絵には、四つ角で四つの方向を指すフィンガー・ポウストが描かれてあるが、それにはネルたちが出てきたロンドンは読めるものの、他の三つの地名は書いてない。だから、もし必要とあらば、この工業地帯をネルたちが通らなかったことにしても、物語の自然さはけっして損われはしないと思う。

もちろん典拠をふまえぬ、架空で絵空事の話は、どうしたって迫力に欠けるもので、作者たるもの、たとえ読者に語らぬまでも、自分の想像の中には、合理的な旅の道筋を想定していなければならないだろう。そうでないとんでもない矛盾撞着を犯す危険性がある。そのことは R. L. スティーヴンソン

が、小説を書く場合には、「暦と地図と間取り図」が絶対必要⁶⁾、と指摘する
とおりである。そしてネルの辿った道筋には、バーミンガムの工業地帯は厳
然として存在しているのである。

しかしそれにしても、もしディケンズが物語の牧歌的雰囲気の手前、この
工業地帯を通ることを避けたいと考えていたのなら、なにかの事情を設定し
て、ネルとその祖父をしてバーミンガムの町を迂回させ、夜空を赤く焦がし、
昼は蒙々たる黒煙を吹き上げる工業地帯を遠望させるだけにすることは、容
易にできたはずである。そうすれば物語の牧歌性とネルのとった道筋の地理
的合理性の兼ね合いは十分に保たれたはずである。

だがディケンズはその方法をとらず、ネルと祖父に工業都市へ足を踏み入
れさせ、そこの悲惨な労働者の生活をつぶさに見聞させている。この小説は
クイルプの仕事場の前のテムズ河に汽船が走っているといった些細な記述を
除けば、その時代が18世紀でも17世紀でも、はたまた中世であってもかまわ
ないほど、超時代的に牧歌的である。それを19世紀につなぎ止めているのは、
唯一この工業地帯の描写の数章なのである。この数章があったがよいか、な
かったがよいか、それは読む人それぞれだろうけれど、少なくともディケンズ
にとっては、それは書かざるを得ないほどの魔力をもつものであったことは
たしかである。この物語がなぜこのようにとくに牧歌的雰囲気を重んじて書
かれたのか、その理由としては、夭折した義妹メアリ・ホーガス追悼のため
だったとぐらいしか考えられないが、そのような作品の中でも、ディケンズ
は第44、45の2章を書かずにはいられなかったのだ。そして第44章に出て
くる、「いったいどうして彼らはこんな騒々しい町に来てしまったのだろうか
？ ほかに静かな田舎の場所がいろいろとあるのに⁷⁾」という言葉には、書か
ずにおくことができればよいのだが、それでも書かずにはおれないのだ、と

6) "With an almanac and the map of the country, and the plan of every house... a man may hope to avoid some of the grossest possible blunders." (R. L. Stevenson, *My First Book*, *The Works*, vol. 16. p. 339, London, Chatto and Windus, 1912.)

7) "Why had they ever come to this noisy town, when there were peaceful country places." (Chap. 44.)

いうディケンズの心中がにじみ出ているような感じがする。やはり産業的、19世紀的イギリスは、ディケンズに対し、このように蠱惑的ともいえるほどの魅力をもつものであったのであり、われわれは *The Old Curiosity Shop* の表面的な牧歌性の裏にこめられた、ディケンズの19世紀イギリスの金権体質に対する激しい呪咀の思いを見落としてはならないのである。

（本稿は昭和59年6月神戸女学院大学で行われたディケンズ・フェローシップ例会においての口頭発表を加筆訂正したものである。）